

彩色やまと絵『狂言絵』



『狂言絵』「仁王」

国文学研究資料館には、文字による文献資料だけでなく、文芸に関する絵画資料も収蔵されている。近年新収した『狂言絵』六十図は、もとは六曲一双の屏風に貼られていたもので、江戸前期の製作と推測される。濃色彩のやまと絵で、狂言の上演舞台の一場面が描かれており、当時の狂言の実態を知る貴重な資料である。

掲載した図はその内の「仁王」という狂言である。この曲の筋は、負けが続いた博奕打が国許から逃げ出すことになり仲間を訪ねると、その男は博奕打を仁王に扮装させて、天降った仏と触れまわり、信心深い人たちから供え物を騙し取ろうと持ちかける。そこで博奕打が仁王の顔付きと構えを作って待っていると、男は参詣人を連れてきて、それぞれが願をかけて布施を供える。しかし足の不自由な男が霊力で足を治そうと大草鞋を供え、仁王の体をなでまわすと顔付きが変わるので、参詣人たちは偽者と気づいて仁王をくすぐり、逃げ出した博奕打ちを追い込むというものである。早くから狂言諸流のレパートリーであった古い狂言であり、現在でも大蔵流・和泉流で上演曲とする。

図柄は仁王の真似をする博奕打を、参詣人の二人が扇でくすぐる場面であるが、シテの博奕打はなんと熨斗目を脱ぎ下げた上半身が裸の格好で描かれる。現在の演出では衣装を脱いで裸になることはない。また、両手をグッと握り締め右手は力瘤をつくるように振り上げ、左手は大地を押さえるように下ろして、右足を鬘桶にかけて踏ん張っている様子に描かれる。体つきも筋肉質に描かれており、これも仁王像をうつしているように見える。仁王は阿吽が一对二体で門などに安置されるが、この博奕打は口を強く閉じ、吽形の真似をしていることがうかがえよう。顔がしかめっ面で描かれるのも、仁王像をうつしているからに違いない。ご存じのように、寺院の門などに安置される仁王像は、上半身をはたけて阿吽の憤怒の形相を見せているから、『狂言絵』のシテの姿は仁王像の物真似としてまことに相応しいものと言えよう。また、台本にも、参詣人が触って「人肌のぬくもりがする」などというセリフがあるし、裸の上半身を扇の先で突かれるのは、いかにもくすぐったそうでこの狂言の内容に合っているのである。

ところで、元禄元年（一六八八）に刊行された『狂言記』外五十番に所収される「仁王」の挿絵の図柄は、肩衣を脱いで頭巾を着けた出立で、右手を上げて左手を下げ、口を閉じ両足を踏ん張ったやはり吽形の相で描かれる。これは肩衣は脱ぎ下げるものの裸にはなっていないので、江戸前期には両用の演じ方があったことがうかがえよう。ともあれ、どちらも当時の上演舞台を彷彿とさせる絵画資料となっているのである。